

## 新刊紹介

### ティムール・ダダバエフ著『社会主義後のウズベキスタン—変わる国と揺れる人々の心』



アジア経済研究所  
2008年

ティムール・ダダバエフ

一九九一年のソビエト連邦（以下ソ連）崩壊に伴い、ウズベキスタンをはじめとする中央アジア諸国は劇的に変化した。その変化とは、社会主義イデオロギーに基づく政治における共産党の指導的役割と計画経済から、資本主義の論理に基づく市場経済へ、民主主義に基づく政治制度への転換である。

これら諸国の経済転換と政治改革に関しては様々な研究文献があるが、人々がこの変化をいかに乗り越えようとしているのか、そして彼らが描く自分たちの現在と未来について一般の人々の目線での分析や情報があ

るとどないのが現状である。本書の狙いは、ウズベキスタンの人々の生活を通して、社会主義後のウズベキスタンをはじめとする中央アジア諸国の一般の人々が直面している課題と苦悩の複雑さを示すことにある。

本書で取り上げる主な問題は次のとおりである。第一に、ソ連崩壊と社会主義後のウズベキスタンの人々の生活環境はどのようなものであり、社会主義の下での生活とどう異なるのか。第二に、人々はその日常生活に満足しているのか。もし満足していないのなら、主な懸念や欲求、願望、希望は何か。第三に、この地域で起こった変化は家族や人々の関係を変えたのか。そうだとすればその変容はどのようなものなのか。そして、第四に彼らが現在、地域国家をどうとらえているのか。それらはソ連時代の人々の考え方と異なるのか。

これらを的確に捉えるために、本書は主に二つの方法を用いている。まず、一般の人々の様々な問題に対する意識を把握するために筆者が関わった二〇〇三年と二〇〇五年の中央アジア諸国における世論調査である。次に、その調査のデータをもとに、二〇〇四年から現在にかけて行っているインタビューである。

これらの問題を以下の六章において分析・検討している。序章は独立への道、独立後に置かれた状況、そしてウズベキスタンが今直面してい

る課題の背景を簡潔に述べる。特に、本章では重要な要素として、ソ連崩壊後、独立を果たしたウズベキスタンの人々の期待と、独立後の過程が与えた複雑な心の揺れを紹介する。

第一章では人々のアイデンティティ形成の主たる要素としての民族性、地域主義、郷土意識について考察する。現代のウズベキスタンにおけるアイデンティティには、民族、地域主義、郷土意識という三つの不可欠な要素がある。この三つのアイデンティティのうちどれが最も重要なのか、それを決めるのは難しい。これらに対する忠誠心は同じ人的・社会的空間に共存しているからである。そのバランスが非常に興味深い点の一つである。

第二章ではウズベキスタン社会の多面的メンタリティに焦点をあてる。人々のメンタリティは、一見矛盾しているように思える二つの傾向を兼ね備えている。すなわち中央アジアの伝統主義（宗教、コミュニティを中心とした生活など）と現代性（高い教育レベル、生活スタイルなど）といった特徴について説明する。

第三章は社会主義後の国民の生活と政治観、政治体制を取り上げる。社会経済の状況が国民の国家に対する姿勢をどのように変化させていくか、一変したイデオロギーと政治的環境の中で、国民が国家に期待することとそうではないことの間心理的にどのような境界線を引いているかを観察する。そのために国民の願

望について述べる。

第四章ではこのような複雑性とソ連崩壊後の政治と生活環境の現実を、ウズベキスタンの日常生活の指標となる国民の福利（現状と期待）および経済状態（世帯収入と支出）を通してみていく。その目的は、政治的・経済的移行期にある環境を明確に描き出すことである。

第五章はウズベキスタンにおいて家族がソ連崩壊にどのように影響されたかを探る。家族の地位、価値観、役割などがどう変わったのか、本章はこうした疑問点を独立後の家族関係の変容と結婚観の変化を通して分析する。

第六章は最終章であり、社会主義以降、独自の道を歩む転換期のウズベキスタンにどのような将来があるのかを考える。人々と政府、個人間の関係と社会の中でイデオロギーの位置づけを考える。最後に、ウズベキスタンと日本の関係の重要性を訴え、ウズベキスタンから日本がどのように見えているのか、米国、英国、韓国、中国といった国々の中で、どのような位置にあるのか、世論調査の結果から分析する。

本書はこれらを通してウズベキスタンをはじめとする中央アジア諸国が経験している転換期における様々な問題の理解と解決に貢献することを目指している。

（ティムール・ダダバエフ／筑波大学大学院人文社会科学研究所 科准教授）